

協調性をはぐくむための援助の工夫

～共通の目的に向かって遊びを進める活動を通して～

沖縄市立北美幼稚園
教諭 具志堅 直子

I テーマ設定理由

近年、少子化や情報化、地域における人間関係の希薄化などに伴い、子どもの育ちにおいて自制心や耐性、規範意識が十分に育っておらず協調性に欠けているなど影響が見られる。そこで、幼稚園の集団遊びを通して主体性や協調性、規範意識や思いやりの心など、道徳性の芽生えをはぐくむことが重要視されている。

幼稚園教育要領の「人とかかわりに関する領域『人間関係』」では、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う」ことを目的とし、「社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける」をねらいの一つにあげている。また、内容の中には、「友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする」「友達と楽しく生活する中で、きまりの大切さに気付き、守ろうとする」と記されている。

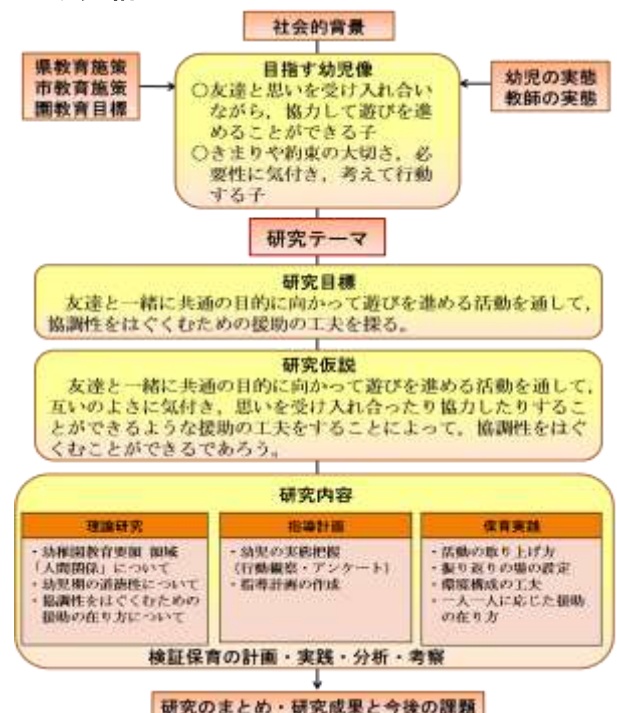
本園の幼児を見ると、友達と誘い合って遊ぶことを楽しんでいる子が多い。反面、遊びの中で自分の思いが通らないと、強い言葉や態度で相手を嫌な気持ちにさせてしまったり、みんなで進める活動の中でふざけたりする子も見られ、主体性と協調性の調和のとれた心をはぐくむことが課題だと感じる。

同時に、これまでの私自身の保育を振り返ってみる。子どもたちの調和のとれた心をはぐくむため、集団遊びや話し合いの場の工夫に努めてきた。その中で、以下のような課題があげられる。一つは友達同士、互いのよさを見つたり認め合ったりすることができるような援助ができていたか。さらには、協力して活動を進める中で、その活動から離れたたりふざけたりして

しまう子に対し、協調性をはぐくむための援助ができていたか、ということである。

そこで、本研究では、友達と一緒に共通の目的に向かって遊びを進める活動を通して、協調性をはぐくむための援助の工夫を図りたい。まず一人一人が自己を発揮しながら、友達と一緒に遊びを進める活動を取り上げていく。その中で、友達と遊ぶ楽しさや思いがぶつかり合うことを体験するだろう。そこで教師は一人一人の思いを受け止め、友達同士で思いを伝え合うことができるような援助をする。そうすることで、相手の思いに気付いたり折り合いを付けたりしながら、協力して遊びを進める充実感を味わうことを通して、幼児期の協調性をはぐくむことができるであろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究構想図



Ⅲ 研究内容

1 理論研究

(1) 幼稚園教育要領「人間関係」について

【領域「人間関係」で改訂された点について】

① 内容の取り扱い(2)においては「自立心と自信をはぐくむ」を視点に、内容が改訂されている。そこで、幼児自身が取り組みたい活動に出会えることや、自分なりにやり遂げる満足感や達成感を味わうことを通して自己を発揮し、友達同士互いのよさを認め合えるような仲間、集団作りを大切にしていきたい。そして、一人一人のよさを生かす学級集団の在り方を考えていく上でも、教師は一人一人をかけがえのない存在ととらえる姿勢を大切に、援助に努めることが大切である。

② 内容の取り扱い(3)においては「協同して遊ぶ心をはぐくむ」を視点に、内容が改訂されている。そこで、一人よりも友達と一緒にだと楽しさが増える、一人ではできないことも友達と一緒にだと実現できるという喜びを味わわせる中で、幼児自身が、自分は学級のかけがえのない一員なんだと感ずることや、友達を大切にしようとする心、信頼感もはぐくまれていくと考えられる。

③ 内容の取り扱い(5)においては「規範意識の芽生えをはぐくむ」を視点に、内容が改定されている。そこで、園生活を通して様々な感情体験を重ねる中で、みんなで一緒に楽しく過ごすためにはきまりや約束を守ることの必要性がわかること、互いの主張に折り合いを付けながら生活を進めることの大切さなど、幼児自身に「気付かせる」ことを意識して援助に努めていくことが重要である。

(2) 幼児期の道徳性について

幼稚園教育要領解説の中に「基本的な生活習慣の形成において、自立心をはぐくみ、自己発揮と自己抑制の調和のとれた自立性を育てることが重要であると記されている。また、幼児期は「自己を表出することが中心の生活から、他者とのかかわり合う生活を通して、他者の存在

を意識し、自己を抑制しようとする気持ちも生まれるようになる」と、幼児期の発達の特性として示されている。

集団生活の中で、自己を発揮しているだけでは上手くいかないことも多くなり、時には自分の感情や行動を抑制しなければならないこともある。しかし、無理をしながらの抑制では真の成長にはつながらない。周囲との関係をよりよくしたい、一緒に楽しく過ごすためにはどうしたらよいのか幼児と共に考え、きまりや約束を守ることの必要性や、他者の気持ちに気付かせていくことが重要である。そして、自己を発揮しながら適応的に自己を抑制することができるよう、調和のとれた心をはぐくむ援助が求められている。(詳しくは報告書の4ページを参照)

(3) 協調性をはぐくむための援助の在り方について

① 主体性と協調性について

(ア) 主体性とは

・自分の意思・判断で行動しようとする態度

(イ) 協調性とは

・お互いに助け合ったり譲り合ったりしながら、同じ目標に向かって協力して活動に取り組む態度

主体性と協調性、どちらもバランスよく併せもつと、自分自身の意見も大切にし、他者ともよい関係を築くことができる。集団生活の中で、子どもの主体性を大切にしながら、協調性をはぐくんでいくことが大切だと考える。

② 幼児期の協調性とは

入園当初の子どもは、周りの子どもが遊んでいる様子を見て、一緒に遊びに参加しているような気持ちを味わったり、同じ遊びを共有することで、一緒に遊ぶ楽しさを感じたりする様子が見られる。こうした他者への興味や関心が、協調性の芽生えと考える。

そして、子どもの生活や遊びといった直接的・具体的な体験の中で、友達とかかわる楽しさや喜び、葛藤を味わうなどの様々な感情体験を積み重ねることや教師の援助を通して、幼児期の協調性がはぐくまれていくものとする。

(ア) 幼児期にはぐくまれる協調性

「みんな（自分も含む）と一緒に、気持ちよく過ごすために大切な心」つまり、「人とのかかわる力」である。

(イ) 人とかかわりを通して育つ心

- ・自分の思いを伝えたり、相手の思いを受け入れたりすることができる。
- ・自分と同じ考えがあること（共感）、違う考えがあること（気づき）がわかる。
- ・互いのよさを見つれたり認め合ったりする。
- ・困っている友達を、助けたり手伝ってあげたりする。
- ・よし悪しに気づき、考えて行動しようとする。
- ・きまりの大切さや必要性に気づき、守ろうとする。
- ・友達と相談したり協力したりしながら遊びを進める。

③ 援助の在り方、教師の役割について

教師は子どもと向き合い、心に届くような言葉かけや援助をしていく。そして、子ども自身が自分で自分を変えていく姿を温かく見守る教師の姿勢が大切なのである。

(ア) 幼児の行動に温かい感心を寄せる

- ・幼児のありのままの姿を受け止め、期待をもって見守る。（肯定的に見る）

(イ) 幼児の心の動きに応答する

- ・教師が答えを示すのではなく、幼児の心の動きに沿って共に心を動かしたり、知恵を出し合ったりするかかわり方をする。

(ウ) 幼児と共に考える

- ・幼児と同じ行動をしてみることで、体の動かし方や視線といった言葉にならないサインを感じ取っていくことが大切である。

(エ) 気づきを生む

- ・幼児が気付かないこと、特に他者の意図や感情に気付かせるような援助をすることが大切である。

子どもは自己を発揮しながら「友達と過ごす喜び」を感じている。そして「互いに気持ちよく過ごしたい」という思いを実現させるために「自己発揮と自己抑制の調和」が大切になる。

そこで、友達と一緒にしかかわる活動や教師の援助を通して「協調性」をはぐくむことで、友達と思いを受け入れ合いながら協力して遊びを進める充実感が味わえるものとする。

2 指導計画

(1) 幼児の実態把握

① 保護者への実態調査アンケート

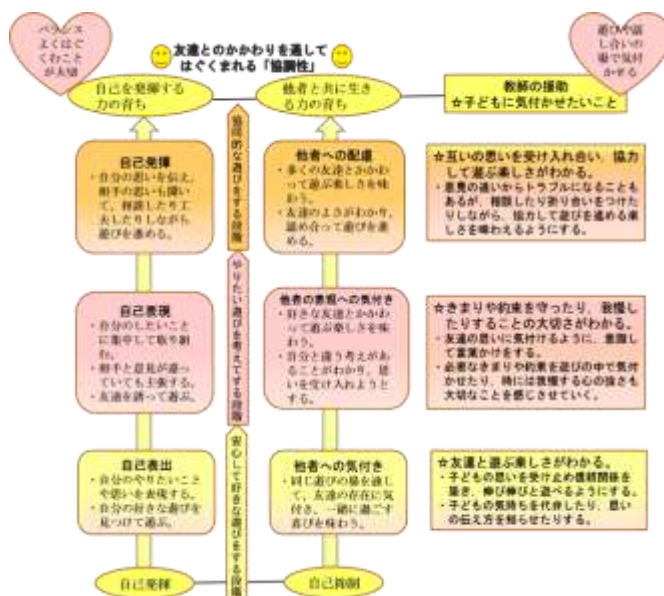
② 幼児へのソシオメトリックテスト

（詳しくは報告書の6～9ページを参照）

(2) 「協調性」をはぐくむための年間指導計画

の作成（報告書の9～12ページを参照）

自己発揮と自己抑制から見る子どもの姿として以下の3段階にとらえ、自己発揮と自己抑制の調和の大切さに気付かせていく援助に努める。



3 保育実践

(1) 活動の取り上げ方

子ども自身が活動の楽しさを味わい、一人よりも友達と一緒にの方が楽しい、嬉しいと感じることができるような活動として、ふれ合い遊びを取り上げる。また、共通の目的に向かって遊びを進める活動として、生活発表会を取り上げる。友達と相談したり折り合いをつけたりしながら、協力して遊びを進める体験を積み重ねることで、協調性がはぐくまれるものとする。

ふれ合い遊びのとらえ

友達とふれ合って遊ぶことにより、人の温もりや優しさを感じることができる。様々な体の部分をくっつけたりつかいだることで、いろいろな遊びを作り出し楽しむことができる。また、強くふれたりふざけたりしたら上手いかわらないことを体験することで、どのように遊ぶ方が楽しいか友達と考え遊びを進めることができる。

○ふれ合い遊び

伝承遊び (ペア)	・おちやらかほい ・みかんの花 ・お寺の和尚さん ・アルプス一万尺 ・あっちむいてほい ・ブルドッグ 等
伝承遊び (集団)	・はないちもんめ ・あーぶくたった ・だるまさんがころんだ・かごめかごめ ・ぞうさんとくものす・おしくらまんじゅう ・ジャンケン列車 ・ずいずいずっころばし 等
・フォーク ダンス ・リズム	・キンダーポルカ ・セブンスステップ ・クリスマスソング (パートナーチェンジ) ・人間っていいな ・ロンドン橋 等
つながり 遊び (ペアから 集団へ)	・なべなべそこぬけ・おやまトンネル ・すもう遊び (指・手・足・尻など体を使う) ・手つなぎ遊び (スキップ・ギャロップ・ジャンプ) ・じゅずつなぎ ・組み体操 等

(2) 振り返りの場の設定

楽しかったことやがんばったことなど共有したり、互いのよさを認め合ったりすることができるような、話し合いの場となるようにする。また、トラブルや不満が生じた場合には個別での対応も大切であるが、グループの仲間や学級全体に投げかけることで、子どもたちと一緒に考え、解決していくことも大切である。

よさも問題も、学級みんなで共有することで、教え合ったり助け合ったり協力したりしながら、自分達の力で解決したり、活動を進めたりすることができるようになって考える。

(3) 環境構成の工夫

子どもたちの素敵な思いや気付いたこと、みんなでも楽しく過ごすために大切なきまりや約束などをハートカードに絵や文字を使って掲示し、活動の中で認めたり再確認したりすることで、思いを共有できるようにする。

(4) 一人一人に応じた援助の在り方

子どもの「気付きを生む」「自己肯定感をはぐくむ」援助を通して、自分が認められる喜びから、他者を認めることができるようになる。

プラスのストローク	行動と意識をつなぐ	自尊心を大切にする
○ありがとう ○ごめんなさい ○すごい！いいね！ ○だいじょうぶ など、心が温かくなる言葉を与える	○行動だけをほめるのではなく、行動を生み出した心(内面の気付き)を認める よい行いを、自分で気付いて行動する心の成長につながる	○温かく受け止める ○行動からよし悪しに気付かせ、過ちを克服する手助けをする ○幼児の思いや経過を他の幼児に伝える 互いの思いに気付き、よりよい人間関係につながる

(詳しくは報告書の 13～14 ページ参照)

Ⅳ 指導の実際

1 活動計画

「生活発表会に向けての取り組み～ふれ合い遊びから劇遊びへ～」

(詳しくは報告書の 15～17 ページ参照)

2 活動の概要

(詳しくは報告書の 17～20 ページ参照)

3 公開検証保育

(詳しくは報告書の 21～26 ページ参照)

(1) 活動名

「友達と協力して、劇遊びを進めよう」

(2) 活動の目標

(3) 本活動における指導内容

(4) 本活動時における子どもの協調性を見取る視点

(5) 活動設定の理由

(6) 本時の展開

指導案		平成22年12月9日(木)
活動の意	・ふれ合い遊びの中で、友達と遊び方を相談したり工夫したりしながら遊ぶ姿がみられる。 ・友達と話し合いをする中で、言葉が強くならないりその場から離れたりしてしまう子が数人みられる。 ・話し合いの中で、友達のことを認めたり、よい考えを教え合ったりする姿がみられる。	
ねらい	・友達と相談したり協力したりしながら、活動を進める楽しさを味わう。 ・みんなで遊ぶ活動の中で、きまりや約束を考えたり守ったりしながら遊ぶことができる。	内 容 ・友達と思いを伝え合いながら相談して遊ぶ。 ・友達と一緒に役になりきったり、ふれ合い遊びをしたりしながら、劇遊びを楽しむ。 ・安全な遊び方や友達の気持ちも考えながら、楽しく遊ぶためのきまりや約束を考えて行動する。
活動概説	導入の場面において、友達と相談してふれ合い遊びの順番を決めたり、みんなで楽しく遊ぶためのきまりや約束を話し合うことにより、友達とふれ合い、協力して劇遊びを進める楽しさを味わえるだろう。	
時間	☆予想される幼児の活動	※教師の援助 □環境構成
9:00	①今日の活動について話し合う。 ☆先生の話を聞く。 ☆みんなで考えた、楽しく遊ぶためのきまりや約束について話し合う。 ②同じ役の友達と、劇遊びの並ぶ順番を相談して決める。	□みんなで楽しく遊ぶために大切なきまりや約束を、ハートカードに記入して話し合い、安全な遊び方やみんなでも協力してがんばる気持ちを合わせることができるようにする。 ※グループの並ぶ順番を相談して決めることができるように伝える。話し合いの中でトラブルが起きた場合は、互いの思いを受け止めながら、自分の気持ちをやさしい言葉で伝えたり、相手の話にも耳を傾ける気持ちを持つことができるような言葉かけをし、友達同士で相談できるようにする。
9:15	③劇遊びを進める楽しさを味わう。(ホール) ☆自分の出番を静かに待つ。 ☆友達と、声や動きを合わせて、発表する。 ♪スキップ・ギャロップ ♪足すもう ♪ジャンケントンネル遊び ♪なべなべそこぬけ ☆安全な遊び方や、楽しく遊ぶためのきまりや約束を考えてみる。	□劇遊びが楽しく展開できるように、音楽を準備する。 ※友達とみんなで劇遊びをがんばっている様子を確認しながら自信につなげ、自分達で声をかけあって劇遊びを進めることができるようにする。 ※劇遊びの中で、自己中心的な行動をしたり、きまりや約束を忘れてしまったりしている子へは、本児の気持ちを受け止めながら、どうしたらみんなと楽しく遊ぶことができるか考えていくことができるような言葉かけをする。 ※ふれ合い遊びを楽しんでいる様子を見守りながら、元気づけたり協力したりしている姿を認める言葉かけをし、楽しさを共有する。
9:35	④今日の活動を振り返る。 ☆気付いたことや感じたことなど伝え合う。	※活動を振り返りながら、素敵だった面やもう少しがんばるともっと素敵になることなど伝えていくことで、次の劇遊びもがんばろうとする気持ちや、発表会への期待が持てるようにする。
9:45	☆学級(廊下)へ戻る。	※友達と協力したことや困ったこと、友達の「素敵だな」と感じた面など伝え合い、楽しさや気付いたことを共有できるようにする。
評価	友達と、並ぶ順番や遊び方を相談したり、みんなで楽しく遊ぶためのきまりや約束を考えたり守ったりしながら、協力して劇遊びを進めることができていた。	

4 公開検証保育の考察

(1) 検証保育の経過

- ① 子どもたちの素敵な言葉や行動などを言葉にして掲示し、楽しく遊ぶために大切な約束をみんなで考えていったことで、友達同士で気付いて声をかけ合ったり、相談したり協力したりしながら遊びを進める姿が見られた。
- ② 友達と協力して遊びを進める子が多いが、自己中心的な行動をとってしまう子も見られた。その際、個と全体のバランスを考えた援助が不十分だったため、最後まで劇遊びをすることができなかった。振り返りの場を通して、友達の思いに気付いたり、周りのことも考えて行動したりすることの大切さを、学級全体で考えることができた。

(2) 授業研究会から

- ・これまでのふれ合い遊びや話し合いの中で、子どもたちはみんなと一緒に協力して遊びたいという気持ちが育ってきている。
- ・活動から離れてしまった子に対し、思いを聞き、受け止めることは大切である。しかし、個に援助することで全体の活動を停滞させてしまう様子も伺えた。教師は「待つ保育」の姿勢を心がけると共に、個と全体とのかかわり方のバランスを考えた援助を工夫する。

V 研究の結果と考察

1 ふれ合い遊びを通して

友達と、動きのタイミングを合わせて遊ぶ楽しさを感じたり、一人ではできない少し難しい遊びも意図的に取り入れたりした。そうすることで、友達と相談したり協力したりしてできる喜びを味わったり、ふざけたりしたら上手いかなことなど体験することにより、どのように遊ぶ方が楽しいかを、友達同士で伝え合って工夫しながら遊びを進める姿も見られてきた。

活動の中で、パートナーを誘えないでいる子へは、子どもの思いを受け止めながら誘い方を一緒に考えたり、教師も一緒に声を合わせて伝えたりする援助を行った。また、その子の様子

や思いを全体にもなげかけたことで、困っている友達の存在に気付き、みんなでいい考えを出して助けてあげるなど「他者の様子に気付き、言葉をかける」ことに、つなげることができた。

その後の園生活の中でも「どうしたの？一緒にやろう」など、友達の様子に気付いて声をかけ合う場面が見られるようになるなど、相手の存在に気付いて配慮したり、一緒に過ごす喜びを感じたりする心が育ってきている。

2 劇遊びを通して

劇遊びを進める中で、友達と遊び方や役割を相談して決める際、なかなか折り合いがつかず、言葉が強くなったり活動が停滞したりするなどトラブルも見られた。しかし、友達と相談する場を繰り返しもつことで話し合う機会、体験を積み重ねることができた。みんなが楽しむためには交代したり折り合いを付けたりすることの大切さを次第に気付き、友達同士で活動を進めることができるようになっていった。

また、共通の目的に向かって遊びを進める活動を通して、「みんなで一緒に成功させよう」という思いから、協力したり互いを受け入れ合ったり、時には遊びたい気持ちを我慢しながら、劇遊びを進める姿が見られてきた。ついには、みんなで劇遊びを成功させることができたことで、協力することの大切さや、成功した喜びや充実感も味わうことができたものとする。

3 振り返りの場の設定、一人一人に応じた援助の工夫を通して

活動の中で、自己中心的な行動をとったり、言葉が強くなったりしてしまう子の姿も見られた。反面、子どもの心の動きからは「みんなと一緒に遊びたい」という思いも感じられた。言葉が強いと友達同士であっても誤解されてしまうことが多い。そこで、子どもの思いを大切にしながら、自分がされたらどのような気持ちになるのか気付かせ、やさしい言葉の伝え方を考えたり、時には自己を抑制する心の強さも大切

ということも一緒に考えたりしていった。そして、その子の思いを周りの子へも伝えていくことで、「意地悪でしたんじゃないんだ。それなら、こうした方がいいのに」など、相手の思いに気付いたり、友達同士でよりよい方法を教え合ったりする姿が見られてきた。

また、子どもたちの素敵な行動や言葉を、その場で誉めて認めてあげたり、振り返りの場でも伝えていったりすることで、みんなで友達のよさを認めることができるようにしていった。活動の中で「(輪から離れていた友達が最後までできた時) がんばりマンの心が強くなって一緒にできてよかった！」など、友達同士で相手のよさに気づき、認め合う姿も見られてきた。

4 ソシオメトリックテストから見る変容を通して

検証前、好きな友達を一人も選ぶことができなかった男の子が、検証後には2名と相互関係が見られた。また、検証前は男の子同士、女の子同士で選ぶ傾向が多く見られたが、男女間の選択関係・相互関係合わせて8から61に数値が広がった。

ふれ合い遊びや劇遊びを通して、友達と協力することや、よいことや困ったこともみんなで考え、相談して解決したり教え合ったりすることを経験する中で、友達関係や仲間意識も深まった。その過程で子どもたちの「みんなと一緒に気持ちよく過ごすために大切な心『協調性』」をはぐくむことができたものと考ええる。

(詳しくは報告書の26～27ページを参照)

5 保護者によるアンケート調査から見る変容を通して

○「当てはまる」と回答した率を検証前後で比較



保護者に対し、アンケートの結果や対応策など伝えることで、家庭と園で協調性をはぐくむために大切な心について、共通理解を図ることに努めた。また、活動の中で見られる子どもたちの姿や変容、教師が意図している支援を学級便りなどで伝えることを通して、保護者の理解を得ながら、共に子どもの育ちを考えていくことにつなげていった。そうすることで、アンケートと共に保護者からは「主体的な感じで、協力し合っている子どもたちの姿は、たくましく感じた」など、成長を感じる声が聞かれた。

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- ・多くの友達と、誘い合ったり受け入れ合ったりしながら協力して遊びを進めることで、子どもたち一人一人の友達関係や仲間意識を深めることができた。
- ・友達と相談しながら遊びを進める機会を多く取り入れたことにより、互いに考えを出し合ったり折り合いを付けたりする姿が見られた。
- ・よさも問題もみんなで考え、話し合っていたことで、友達の思いや互いのよさに気付いたり、よりよい考えを教え合ったりしながら、みんなで気持ちよく過ごすために大切なきまりや約束を考えて行動する姿が見られた。

2 今後の課題

- ・「規範意識や耐性」の育ちは、個人差が見られる。子ども自身が守ることの必要性や、時には我慢する心の強さも大切であることに気付いて行動できるよう援助の工夫に努める。
- ・一人一人の「自己発揮と自己抑制の調和」を大切にしながら協調性をはぐくむことができるよう、集団と個のかかわり方のバランスを考えた援助の工夫に努める。

(主な参考文献・引用文献)

- ・2008 『幼稚園教育要領解説』 文部科学省
- ・2001 『幼児期における道徳性の芽生えを培うための事例集』 文部科学省
- ・中沢和子著 1999 『新保育内容シリーズ 子どもと環境』 菊文書林
- ・石崎陽子編著 1984 『保育に生かす新体操』 明治図書
- ・小池タミ子著 1979 『幼児の劇あそび』 国土地
- ・2010 『指導の手引き 人とのかかわりを豊かにする教育の推進』 兵庫県教育委員会
- ・濱川秀樹氏 2010 神岡幼稚園教諭等研修会講演資料『協同性の育ちと教師の役割について』
- ・須田敏夫氏 『輝く輪と素敵な笑顔求めて』 Webページより